

世界文学全集

11

C・ブロンテ
ジェイン・エア

E・ブロンテ
嵐が丘

阿部知二・三宅幾三郎 訳

河出書房

© 1969



Reproduced by permission of The World Publishing
Company from WUTHERING HEIGHTS by Emily Brontë
Illustrated by Nell Booker
Copyright © 1947
by The World Publishing Company

カラー版 世界文学全集 第11巻

C・ブロンテ ジェイン・エア

E・ブロンテ 嵐が丘

昭和 41 年 6 月 15 日初版発行

昭和 44 年 7 月 30 日5版発行

訳 者 阿 部 知 二
三宅幾三郎

装幀者 亀 倉 雄 策

発行者 中 島 隆 之

印刷者 澤 村 嘉 一

印 刷 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

定 価 850 円

製 本・中央精版印刷株式会社

製 函・株式会社光陽紙器製作所

本文用紙・三菱製紙株式会社

表 紙・日本クロス工業株式会社

東京都千代田区神田小川町3の6

電話 東京 (292) 3711 (大代表)・振替口座 東京 10802

目 次

C・ブロンテ/E・ブロンテ

解 説	年 表	嵐 が 丘	ジ ェ イ ン ・ エ ア
.....			
597	589	349	3

巻頭口絵 フロンテ姉妹

(右よりシャーロット, エミリ, アン)

本文カラーさし絵

ジェイン・グラダッシ

ネル・ブッカー

バート・B・リヴィングストン

© 1953 Panthéon

© 1947 The World Publishing Company

© 1966 Bert B. Livingston

装 幀 亀倉雄策

ジ
エ
イ
ン・
エ
ア

阿
部
知
二
訳

主要人物

ジェイン・エア この物語の女主人公。孤兒となり、母方の伯父の家に引き取られたが、伯父なきあと、虐待冷遇をうけ、慈善学校に迫りやられる。しかし独力で運命を切りひらき、苦難ののち幸福な生涯に入る。瘦せて青白く、決して美人ではないが、美しい魂とすぐれた才能をもち、内にはげしい意志と情熱とをたたえた女性。

リード夫人 ジェインの母方の伯父（ゲーツヘッドの治安判事）の未亡人。ジェインをきらって虐待する。

ジョン・リード

イライザ

ジョージアナ

リード夫人の子どもたち。

プロクルハースト ロウウッド慈善学校の偽善的な管理者。

マライア・テンブル先生 ロウウッド学校の監督。

ヘレン・バーンズ ロウウッド学校の女生徒。

エドワード・ロチェスタ ソーンフィールド荘の主人。中年で、浅

黒くがみのある顔だちと、堂々たる体格の、金持の紳士。食欲な父と兄との奸計で、不幸な結婚をし、数奇な運命にもあそばされてゆが

められているが、魂の底には豊かな愛と真実とを持つ人。

フェアファクス夫人 ロチェスタ家の家政婦。

バーサ・メイスン エドワードの氣ちがいの妻。

アデール フランスのオペラ・ダンサーの小さな娘。ロチェスタがゆえあつて後見している。

グレイス・プール ロチェスタ家の女召使。

セント・ジョン・エア・リヴァーズ モートン地方の没落旧家出の若い牧師。ギリシア型の美男子で、活動的で学問もあるが、神の福音を地上にもたらす偉大な高貴な目的のためには、人間的な感情さえも犠牲にしてはばからない、尊敬はできても愛情はもてないような人。のちジェインの従兄であることがわかる。

ダイアナ・リヴァーズ

メアリ・リヴァーズ

セント・ジョンの妹たち。

ハンナ リヴァーズ家の女召使。

ロザモンド・オリヴァー モートン地方の金持の令嬢。

1

その日は、散歩などできそうにもなかった。なるほど、朝のうち一時間ばかり、葉の落ちた灌木林の中をぶらぶらしてはみたが、昼食がすんでからは（リード夫人は友だちがこないときには早めに食事をした）、冷たい冬の風がひどく暗うつな雲をまねきよせ、ひどく身にしみるような雨を呼んだので、それ以上戸外の運動をするのは、もうできない相談だった。

わたしは、それがうれしかった。長い散歩は、とくに寒い午後にはいやでたまらなかったからだった。手足の指をかじかませ、保母のベッシーにしかられて悲しい思いをし、リード家のイライザやジョンやジョージアナなどよりも体力が劣ることを知っていじけた気持ちになり、冷えびえとするたそがれどきに家へ帰ってくるのは、思ってもぞっとすることだった。

いまいったイライザやジョンやジョージアナは、もう客間で母のまわりに集まっていた。母は暖炉のそばの長椅子にもたれ、かわいい子どもたちに（このときは、たがいにけんかもしていなかったし、泣きさけんでもいなかった）かこまれて、まったく幸福そうだった。そして、わたしを仲間はずれにしておいて、彼女はいうのだった。おまえをそばへ寄せつけないようにしなければならぬのは残念だけれど、

おまえが、もっと人好きのする子どもらしい性質、もっと気持ちのいい快活な態度——つまりいつてみれば、もっとほがらかな、あっさりとした、自然さを——身につけようと本気になってつとめていることを、ベッシーから聞くなり、わたしのこの目で見るとなりしないうちは、満ちたりた明るい子どもたちだけにだけあたえる特権を、おまえにはさずけるわけにゆかないのだ、と。

「ベッシーは、わたしが何をしたっていいましたの？」とわたしはたずねた。

「ジェイン、わたしは理屈をこねまわしたり、なんののの聞きながら人はきらいなのよ。それに、子どものくせに、そんなふうになんてなじるなんて、ほんとにかわいらしくもない。どこかに腰をかけて、感じよく口がきけるようになるまで、黙っていなさい」

客間のとなりには小さな朝食用の食堂があった。わたしはそとそこへもぐりこんだ。そこには本棚があった。わたしはすぐに、さし絵がたくさんついているのをと気をくばって、一冊の本を手にした。窓下の腰掛けにのぼって、両足をちぎめてトルコ人みたいにあぐらをかいた。そして赤い毛織りのカーテンをほとんどびったりと引いて、二重の隠れ場所におさまった。

深紅のたれ布のひだが右手の視野をさえぎっていた。左がわは、透きとおった窓ガラスで、それは荒々しい十一月の空気からわたしをまもってはくれたが、引きはなしたわけではなかった。本のページをめくりながら、ときどきわたしは、その冬の午後の様子に目をやった。はるか遠くは霧と雨との青白い空白になっており、近くには雨にぬれた芝生と風に打たれた灌木とがながめられ、止めどもなく降る雨は、長いもの悲しげにひびく強風にはげしく吹きまわっていた。

わたしは本——ビュイックの「英国鳥類史」に目をもどした。大体のところ、その本の本文はどうでもよかったけれども、前置きの何ページかは、子どもながらに、白紙のように見のがすことは、できなかった。それは海鳥の棲息地、海鳥しか住んでいない「孤独な岩や岬」

とか、ノルウェーの最南端の岬リन्दネス、別名ネイズ（岬）から北岬にかけての、小島が散在するノルウェー海岸とかのことが書いてあるページだった――

そこに北海は大いなる渦を巻きて

さいはての北冥の、裸なる暗き島々をめぐりて

荒れて沸き立ち、また大西洋の波濤は

嵐はゆるへブリデーズの島々の間におどろこむ

またラブランド、シベリヤ、スピッツベルゲン、ノヴァ・ゼムブラ、アイスランド、グリーンランドなどの荒涼たる海岸を、「北極地帯の広大なる地域、陰惨な、人の見捨てた地方――この、霜と雪との貯蔵地では、幾世紀にもわたる冬の堆積物である堅い氷原が、アルプスの峰をいくつも積みあげたほどに凍りつき、極地をとりかこみ、極寒の幾倍もの酷烈さを凝縮している」とのべているあたりも、読みとばすことはできなかった。こうした死のように青白い地域について、わたしはわたしなりに想像してみた。それは、子どもたちの頭にぼんやりとただよう、なかばしか理解できていない想念の例にもれず、とりとめもないものだったが、そのくせふしぎに印象が強かった。こうした前置きのページの文句は、つきにあるさし絵と結びついて、大波やしぶきの中にぼつんと立っている岩石とか、人影もない岸べに打ちあげられたこわれた小舟とか、いままさに沈もうとしている難破船を横雲のすき間からちらとながめている冷たく青白い月などに、意味をあたえるのだった。

またこの上なくさびしげな教会の墓地の絵があり、そこには銘をきざんだ墓標があり、門があり、木が二本立ち、ひくい地平線をこわれた塀がさえぎり、のぼったばかりの三日月が夕暮れどきであることを示していたが、それらにつきまとう感情を、わたしはいいあらわす力をもたない。

波ひとつない海上に、風のため浮かんだきりでじっと動きもしない二そうの船を、わたしは海の幽霊だと思つた。

悪魔が泥棒の背負った包みをうしろから取り押えているところは、いそいでページをさきにめくつた。恐怖そのものだったからだ。

岩の上に超然と腰をおろして、絞首台のまわりに集まった遠くの群衆をながめている、黒角をはやしたものの絵も、そうだった。

どの絵もそれぞれ一つの物語を告げていた。わたしの未熟な理解力とおさな感情とは、測り知れぬことも多かったが、しかも、いつも底知れぬほど興味があつた。ベッシーが冬の夜、ときどき話してくれる話におとらぬほどだった。そういうときの彼女は、たまたま上げんで、子供部屋の暖炉のそばに火のし台を持ってきて、そのまわりにわたしたちをすわらせ、リード夫人のレースの縁飾りを仕上ぜたり、ナイトキャップの縁にひだを寄せたりしながら、古いおとぎ話や、その他の（多くの版では「もつと古い」）民謡から、それからまた（あとになって、わたしは知つたのだが）「パメラ」（サミュエル・チャンドス）や「モアランド伯爵ヘンリ」（ヘンリー・ハリスが書いた小説）の文章からとつた恋物語とか冒険談の一節とかを聞かせてくれて、熱心に耳をかたむけるわたしたちの心を満たすのだった。

ビュイックの書物をひぎにのせて、そのときのわたしは楽しかった。少なくとも、わたしなりに楽しかった。じゃまされはしないかと、そのことだけは心配だったが、そのじゃまがあまりにも早くきたのだった。朝食用の食堂の扉がひらいた。

「こら！ ふさぎ屋！」とジョン・リードの声がひびいた。それから彼はだまりこんだ。部屋にはだれもいないらしいと見たのだ。

「あいつ、いったいどこにいるんだろう？」と彼はつづけた。「リジン（ジョーインはジョーイン）のやつ、ここにはいないよ。雨の中をおもてへ出て行つたんだと、かあさまに話してやれよ――悪いやつめ！」

「カーテンを引いておいてよかつたわ」とわたしは思った。この隠れ場所が彼に見つかりませんようにと一心に願つた。いや、ジョン・リードだつたら見つかりっこはないだろう。彼は目にしても勘にして

も、すばしこくはないのだ。ところがこのとき、イライザが戸口から顔を出して、たちまち口をひらいた――

「きつと、窓の下に腰掛けにいますわよ、ジャック」(ジャックはジョンの愛称、訳者)

そこでわたしはすぐに出て行った。というのは、あのジャックに引きずり出されることを思うと、身ぶるいしてきたからだだった。

「何か用があるの？」と気おくれしておずおずと、わたしはたずねた。

「リードさま、何かご用でございますか」といふ返事だった。「こつちへこいというんだ」といって、彼は、肘掛け椅子に腰をおろすと、こつちへ寄って自分の前へ立てという身ぶりをした。

ジョン・リードは十四歳の学校生徒だった――わたしはまだ十歳だったので、四つ年上だった。年の割にはからだが大きくふとっており、皮膚はうす黒く、不健康で、顔がだだっぴろくて、目鼻立ちはむくんだようで、手足がふとく、指さきも大きかった。食事のときはがつつ食べるのがならわしなので、そのため胆汁質になり、目はかすんでただれ、頬がたるんでいた。いまは学校へ行っていなければならぬはずなのに、「身体虚弱」という理由で、母親が家につれもどしてから、もう一、二か月になつてゐる。先生のマイルズさんは、家から送つてよこすケーキや砂糖菓子をもっとすくなかつたならば、からだのほうはずいぶんよくなるのだがと断言していたが、母親はそんなきびしい意見には耳をかそうとはせず、ジョンの血色の悪いのは、勉強をしすぎるためと、おそらく家が悲しくてならないためとだろうという、もっとお上品な考えにかたむいていた。

ジョンは、母親にも姉妹にもあまり愛情をもっていなかったし、わたしにたいしては憎しみをもっていた。わたしにはいばり散らして、ひどい目にあわせた。それも週に二、三度どころではなく、日に一、二度どころでもなく、ひっきりなしだった。わたしは全神経で彼を恐れ、彼が近づいてくると、骨についている肉という肉がちぢみあがるのだった。彼から受ける恐怖感のために気をうしなうほどになること

が間々あったが、それは彼がおどかしたりいじめたりしても、どこへも訴えようがなかったからだだった。召使たちは、坊ちゃまに逆らつてもわたしは味方をして、彼の怒りを買いたくはなかったし、リード夫人は、この問題については盲目でつんぼだった。夫人の面前でときどき、いけないところではもつとたびたび、わたしをなぐつたり、ののしつたりしても、見えもしない、聞こえもしないふりをしていた。

いつものようにジョンのいうことを聞いて、わたしは椅子に近よつた。彼は約三分ほど、わたしに向かって舌を、つけ根のところが痛みかねないほど、できるだけ突きだして見せた。わたしは、彼がすぐになぐりつけてくるのがわかつていたので、その一撃を恐れながらも、やがてかかつてくる彼の、むかつくような不快な顔をつくづくながめた。彼はわたしの顔からその気持を読みとつたのだらうか、いきなり、ものもいわずに力まかせにわたしを打った。わたしはよろよろとしたが、からだの平衡を取りもどすと、椅子から二、三步あとへさがった。

「これはな、さつき、こしゃくにもかあさまに口答えしたからだぞ」と彼はいった。「それに、こそこそカーテンのうしろに隠れたり、さつきみたいな目つきをするからだ、このねずみめ！」

ジョンの悪たいには慣れていたので、わたしはそれに答えようと思つたことはなかった。わたしの心配は、侮辱のあとにかならずやってくる攻撃に、どう耐えようかということだった。

「カーテンのうしろで、何をしてたんだ？」と彼はたずねた。

「本を読んだのよ」

「その本を見せろ」

わたしは窓のところへもどつて、本を取ってきた。

「おまえには、うちの本を持ちだす権利なんかない。おまえは、かあさまもいってゐるけど、居候なんだ。おまえはちつともお金を持つてないんだ。おまえの父親は、一文の金も残さなかつたんだ。おまえなんか、乞食でもすればいいんで、ぼくたちのような紳士の子どもといつ

しょにここに住んだり、ぼくたちと同じものを食べたり、かあさまにお金を出させて服を着たりする身分じゃないんだ。さあ、ぼくの本棚をかきまわしたんだから、思い知らせてくれるぞ。本はみなぼくのものなんだからな。この家は、みなぼくのものなんだ。いや二、三年したらぼくのものになるんだ。扉のそばへいつて立っている。鏡と窓のころはよけてな」

はじめは彼がどういうつもりなのか気がつかなかったで、いわれどおりにしたが、彼が本を振りかざして投げる動作を起こすのを見て、わたしは本能的にあつとさけんで身をよけた。しかしもはやおそかった。本は飛んできてわたしにぶつかり、わたしは倒れて、扉に頭を打って傷ついた。傷口からは血がながれ、ずきずきと痛んだ。恐怖がその頂点を越してしまつて、べつな感情がつきあがつてきた。

「意地悪のひどい人！」とわたしはいつた。「あんたは人殺しそっくりよ——奴隷の監督そっくりよ——ローマの皇帝そっくりよ！」

わたしはゴールドスミスの「ローマ史」を読んでいて、かねがね皇帝のネロとかカリギュラなどがどんなものだったか、知っているつもりだった。それにまた、心ひそかに暴君たちとジョンとを比較していたのだが、こんなふうに出していいおうとは、夢にも思っていないかった。

「なんだと！　なんだと！」と彼はさげんだ。「こいつ、ぼくに向かつてそんなことをいうのか？　聞いたかい、イライザとジョージアナ？　かあさまにいつつけてやろうか？　だがそれよりも——」

ジョンは、やみくもに飛びかかつてきた。彼が、髪の毛や肩をひつつかむのを、わたしは感じた。だが、彼は、死にもの狂いのわたしとたたかわなければならなかった。わたしはジョンを、はつきりと、暴君、人殺しとして見たのだった。わたしは、頭から首すじへと血が一滴一滴したり落ちるのを感じ、何か突き刺すような痛みをおぼえた。その感じが、しばらく恐怖心などを忘れさせてしまつて、わたしは気がいいように彼に向かった。自分の両手がどんなことをした

か、よくはわからなかったが、ジョンはわたしを「ねずみめ、ねずみめ！」といつて、大声でわめいていた。彼のほうには加勢がきた。イライザとジョージアナとが、二階にいるリード夫人を呼びに行ったのだ。夫人はベッシーと小間使のアボットとをしがえて、この場にあられてきた。わたしたちは、ひき分けられた。わたしはこういう言葉を耳にした——

「あら、まあ！　ジョンさまに飛びかかるなんて、なんて乱暴な！」
「こんなに恐ろしい暴れものを、見たことがあるでしょうか！」
それからリード夫人も声を合わせた——

「この子を赤い部屋へつれて行つて、鍵をかけておきなさい」すぐさま四本の手がわたしをとらえ、わたしは二階へ運ばれた。

2

わたしはずつと反抗しつづけた。わたしにはいままでにないことだったが、それは、ベッシーやアボットさんが、わたしをいけない子だと思いがっている気持を、いっそう強める出来事でもあった。じつをいうと、わたしはすこし気が変になっていた。いやむしろ、フランス人がよくいうように、われを忘れていた。ほんの一瞬の反抗のために、すでに、何か怪しい処罰を受けなければならなくなったことを感知しながら、わたしは反逆する奴隷さながらに、やぶれかぶれになつて、どんなことでもしてやろうと決心した。

「腕を押えて、アボットさん。この子は気がいい猫みたいよ」

「恥知らずよ！　恥知らずよ！」と小間使がさげんだ。「エアさん、なんておそろしいことをなさつたの？　恩人の坊ちゃん若紳士をおつなんて！　若主人をおつなんて！」

「主人ですって？　どうしてあの人、わたしの主人なの？　わたしは召使なの？」

「いいえ。あなたは召使にもおとるのよ。自分で食べてゆくために、

何もしていないんですもの。さあ、腰をおろして、あなたの悪かったことをよく考えてごらんさい」

このときはもう、二人はわたしをリード夫人がいった部屋へつれてきて、腰掛けにかけさせていた。わたしは衝動的にばねのようにとびあがろうとしたが、たちまち四本の手で押えられてしまった。

「じっとすわっていないと、しばらくおかなけりゃならなくてよ」とベッシーがいった。「アボットさん、靴下どめを貸してくださいな。わたしのは、この人がすぐに切ってしまうだろうから」

アボットはあちらを向いて、ふとい足から、入用のひもをはずそうとした。このようにしるものを用意され、こうしてなおさら屈辱が加わることを思うと、わたしは、いくら興奮もさめた。「それをはずさないで」とわたしはさげんだ。「じっとしていますから」

その保証に、わたしは両手で腰掛けにしがみついた。

「じっとしてゐるんですよ」とベッシーがいった。そしてわたしがほんとうにおとなしくなったのを確かめると、押えていた手をゆるめた。それから彼女とアボットさんとは、腕組みをしたまま、わたしの正気なことが信じられないかのように、けわしい顔つきで、疑わしうにわたしの顔をじっとながめるのだった。

「この人は、こんなことは、いままではしたことはないですよ」と小間使の方を向きながら、ようやくベッシーがいった。

「でも、心の中ではいつもこうだったのよ」という返事だった。「わたし、奥さまにはこの子についての考えを何度も申しあげたんですけれど、奥さまも同じご意見でしたわ。この子は、腹黒いのよ。この年ごろで、こんなに気の知れない子は、わたし見たことがないわ」

ベッシーはそれには答えずに、しばらくしてから、わたしに言葉をかけていった――

「あなたは、リード奥さまにはお世話になった恩があるということのを、忘れてはいけません。あなたを養ってくださっているのよ。ここ

から追い出されでもすれば、あなたは養育院へ行かなけりゃならないのよ」

この言葉には、何も答えることはなかった。それはべつにはじめて聞く言葉ではなかった。もの心がついて以来のかずかずの記憶をたどってみても、同じような暗示は何度も受けていたのだ。人のやっかいになっていないことを非難する、こうした言葉は、わたしの耳には、とりとめもない歌い文句のようになっていた。心を痛ませ押しつぶすようにのしかかっているのだが、その意味は半分しかわからなかった。アボットが口をはさんだ――

「それにあなたは、自分がお嬢さま方や若さまと対等だなんて考えてはいけない。奥さまがご親切に、あなたをあの方たちといっしょに育ててくださっているんですからね。あの方たちは、そのうちお金をどっさりお持ちになるだろうけど、あなたはちつとも持てませんよ。へりくだって、あの方たちのお気に入るようにつとめるのが、あなたの身の上です」

「こういうのも、あなたのために思っているのよ」と、すこし声を和らげて、ベッシーがつけくわえた。「お役に立つ、感じのいい子になるようにしなけりゃいけないわ。そうすれば、ここに住みつくことができるでしょうけど、怒ったり乱暴なことをしたりすれば、奥さまに追い出されてしまいますよ。きつとね」

「それに」とアボットがいった。「そんな子は神さまの罰があたるわ。かんしゃくを起こしている最中に、神さまに打ち殺されてしまうかもしれないわ。そうしたら、どこへゆけばいいの？ さあ、ベッシー、この子をここへおいてゆきましょう。何をくれるといわれても、この子のような性質はたくさんだわ。エアさん、一人きりになったら、お祈りをなさい。心を改めないと、煙突から悪いものが降りてきて、あなたをさらってゆくかもしれないからね」

二人は扉をしめ、それに錠をかけて立ち去った。赤い部屋というのは、真四角の室で、人が寝ることはめったになか

った。ゲーツヘッドの館に、思いがけず来客がどつと押しよせ、館じゅうの部屋を全部使用しなければならぬときでもなければ、じつさい、使われたことはないといつてもいい。それでいながらこの部屋は、館の中でいちばん大きな、いちばん壮麗な室の一つだった。どつたりとしたマホガニ材の柱でささえられ、深紅色の緞子のカーテンをたらしめた寝台が、その中央に幕含みに目だっていた。いつも錯戸をおろした二つの大きな窓は、同じ緞子の花ずなやたれ幕に、なかばおおい隠されていた。じゅうたんは紅く、寝台の足もとにあるテーブルも、深紅の布でおおわれており、壁はほのかに淡紅色を流したやわらかな鹿毛色で、衣装だんすや化粧台や椅子は、黒光りするほどみがきあげた古いマホガニ材でできていた。こうした、まわりの濃い暗影から、高くそびえてしろじろとかがやいているのは、雪のようなマルセイユ織りの上掛けをかけた、山積みのマットレスと枕だった。それにおとらず目だつのは、寝台の枕もとにある、たつぷりとクッションのついた安楽椅子で、これもしろじろと光り、その前には足台がおかれていて、わたしはよく思ったのだが、それは青白い玉座のようだった。

この部屋は、ほとんど火をたたくことがなかったので、冷えびえとしており、また子供部屋や台所から遠くはなれていたもので、しんと静まりかえり、またほとんど人が立ち入らぬことになっていたので、森厳な感じをあてていた。女中だけが、鏡や家具から一週間のうちに静かにつつめたほこりをふきとるために、土曜日ごとにここにくるのだった。それにリード夫人も、ほんのときたま、衣装だんすの秘密の引き出しの中身をしらべに、ここにはいるのだが、その引き出しには、さまざまな文書や、夫人の宝箱や、亡き夫の小画像などがしまっていた。この亡き夫ということに、この赤い部屋の秘密——壮麗であるにもかかわらず、このようにも寂しいものになっている魔力がひそんでいたのだ。

リード氏が亡くなって九年になっていた。彼が最後の息を引きとつ

たのはこの部屋で、ここに遺体が安置され、ここから棺が葬儀屋の手で運びだされたので、その日から、もの悲しい聖別の感じのため、この部屋へ人はあまり足を踏み入れなくなったのだった。

ベッシーと意地悪なアボットさんとが、わたしを釘づけにしておいた座席は、大理石の炉棚のそばの、ひくい長椅子だった。わたしの前には寝台がそびえ、右手には、高い黒ずんだ衣装だんすがあって、やわらげられたときれとぎれの反射光を發して、その鏡板の光沢に変化を見せており、左手にはおおいをかけた窓があり、そのあいだにある大きな鏡が、人氣もない寝台と室との莊嚴さを映しだしていた。わたしは、ベッシーたちが扉に錠をおろしたかどうかはつきりわからなかったで、動くだけの勇氣がでてくると、立ちあがって見に行った。ああ！ やっぱり、これほど嚴重な牢獄はなかったろう。もどつてくるのに、鏡の前をどうしても通らなければならなかった。魅きつづられたわたしの目は、何気なしに、鏡がのそかせている奥底をさぐった。その幻想の洞穴の中では、すべてが現実よりも冷たく暗く見え、そこでわたしをじつと見つめている奇妙な子の姿は、暗がりに点々と白い顔と腕とを浮かべ、ほかのすべてが静黙に沈んでいるのに、ぎらぎらと恐怖に光る目を動かして、まさに妖精のような感じを呈していた。それはベッシーの夜話の中で、荒野の羊齒の茂るさびしい峡谷から出てきて、行きくたれた旅人の眼前に姿をあらわすという、なかば妖精なかば小鬼の、小さな化けものようだとわたしは思った。わたしは椅子にもどった。

その瞬間に、迷信的恐怖がわたしをとらえたのだが、まだそのときは、完全にわたしを征服してはいなかった。わたしの血はまだ燃えており、反抗して立つ奴隷の氣概が、はげしい活気で、わたしを力づけていた。目前のぶきみに打ち負けるまえに、わたしは、胸にあふれてくるかすかの思い出をせき止めようとしなければならなかった。

ジョン・リードの暴虐なふるまい、姉妹たちの誇らしげな冷淡さ、母親の憎悪心、召使たちのえこひいきなどが、わたしの混乱した心の

中に、まるで濁った井戸のどす黒い瀬澄（せじやう）のように浮かびあがってきた。どうしてわたしは、いつも苦しみ、いつもしかりつけられ、いつも責められ、いつまでも罰せられるのだろうか？ どうして、わたしは、人に氣にいられないのだろうか？ どうして、だれかにかわいがられようとつとめても、だめなのだろうか？ イライザは強情でわがままなのに、尊敬されている。ジョージアナは甘やかされて、ひどく意地が悪く、人のあらばかり探し、ごう慢にいばり返っているのに、だれからもちやはやされていいる。彼女の美しさ、淡紅色の頬や金色の巻き毛などが、顔を見るだれにも、よろこびをあたえ、どんな落ち度でも見のがしにさせる力があるらしいのである。ジョンに逆らうものはだれもなかった。まして罰するものもなかった。鳩の首をねじろうが、孔雀の子びなを殺そうが、羊に犬をけしかけようが、温室のぶどうの実をもぎとろうが、温室秘蔵の植物のつぼみをつもようが、おかまになしだった。母親のことを「ばあさん」と呼ぶこともあり、ときには母親が自分と同じように浅黒い肌（かみ）をしていると毒づいたり、彼女の願いをそっけなく無視したり、また彼女の絹服をひき裂いて台なしにすることすらも珍しくはないのだが、それでも彼は「かけがえのない愛し児」だった。わたしはあやまちをおかすまいと、びくびくしていた。どんな勤めでも充分にはたそうと努力していたのに、朝から昼まで、昼から晩まで、いたずらでうるさいだの、むつりして陰険だのといわれつづけたのだ。

ジョンになぐられてたおれたときの傷で、頭はまだ痛んで、血が流れていた。ジョンがわたしを、めった打ちしても、だれもとがめるものがなかったのに、もうこれ以上の理不尽な暴力を避けようと、彼に手むかうと、みなからいっせいにのしりをあびせかけられるのだった。

「不公平だわ——不公平だわ！」と、わたしの理性は、苦悩の刺激に突きうごかされて、一時的ではあるが子どもらしくもない力強きで、さげんだ。また決意も同じくらいに目ざめてきて、耐えられない圧迫

からのがれるために、何か並みはずれた手段——脱走するとか、それがうまくゆかないなら、飲まず食わずにいて自殺するとかというような——をとれど、そのかすのだった。

わびしいあの日の午後の、わたしの魂の恐慌を、なんといったらよろしいであろうか。わたしの頭はどんなに立ち騒ぎ、心はどんなに反乱をおこしていたことだろう！ しかし、なんとという暗闇の中で、なんとという厚い不可能の謎につつまれて、その心の戦いがなされたことだろう！ やむことのない心の疑問——どうしてこのようにわたしは苦しまなければならぬのか、わたしには答えられなかった。いまは、距離をおいて——何年の距離と年数はいわないが——わたしには、それがはつきりわかっているのだが。

ゲーツヘッド館では、わたしは不協和音だった。そののだれとも似ていなかった。リード夫人とも、夫人の子どもたちとも、お気に入り（お気に入り）の召使たちとも、調和すべきものは何もなかった。彼らがわたしを愛さなかったとしても、じっさい同じくらいに、わたしも彼らを愛さなかった。彼らは自分たちの一人と共に鳴でできないものを、愛情をもって見る義務はなかった。氣質も能力も傾向も、自分たちとは正反對の異質な人間、自分たちの利益にもならず、楽しみを増すこともない、一個の無用者。また、自分たちの扱いにたいしては怒りの芽を、判断にたいしては輕蔑の芽を、心の内にそだてている有害物。そういうものを愛情をもって見る義務はなかった。わたしにはわかつていいるのだが、わたしがもし快活で、気がきいていて、のんびりしていて、きびきびして、きりょうのいいお転婆さんだったら——同じように人の世話になる、寄るべない身の上であっても——リード夫人は、わたしがいるのをもっと満足そうにがまんしていたらうし、子どもたちだって、わたしに対してもっと仲間同士の暖かさを示したろうし、召使たちだって、わたしを子供部屋の「贖罪の山羊」（旧約レビ記参照。他人の身代）にすることはもっと控えたであろう。

日光は赤い部屋から去ってゆきはじめた。四時をまわっていたの

で、曇った午後がうらさびしいたそがれに移りかけていた。雨がまだ、たえまなく階段の窓をたたき、館のうら手の森では風がうなるのがきこえた。わたしは、しだいに石のように冷たくなり、やがて勇氣もくじけてしまった。屈辱感とか、自己への懷疑とか、みじめな憂うつなどの、いつもの気分が、力のおとろえてゆく憤怒の燃えさしの上に、しめっぽく降りそそいだ。みな、わたしが悪いといったが、たぶんそうなのかもしれない。餓死しようなんて、たったいま、わたしはなんということを考えていたのだろうか？ それはたしかに罪悪だ。それにわたしは死ぬ用意ができているのか。それとも、ゲーツヘッド教会の内陣の下納骨所が、そんなに気に入った目的地なのか。あの納骨所にリード氏は葬られているのだ、とわたしはきかされているのだが、それを使うとリード氏の遺志が思い出され、わたしは恐怖心をつのらせながらも、そのことをつくづく考えてみた。わたしはリード氏のことを思い出すことはできなかったが、彼がじつの伯父——母の兄で——わたしが両親のない赤んぼのとき、この家に引きとってくれたこと、さらにいまわのきわに、夫人にわたしを自分の子一人として養いそだてることを約束させたことを知っている。リード夫人はたぶん、自分はこの約束を守ったと思っているのかもしれない——それにおそらくは、彼女の性質のゆるすかぎりでは、ちゃんと守っているのだらう——ところが、夫が死んでからは、自分の身うちでもないなんのつながりもないやつかい者を、ほんとうに好きになれようか？ かわいがる気にもなれない風来坊の子どもの親代わりになるという、なかばむりやりの約束にしばらくは従っていることを知り、気性のあわないよそものが自分の家族のなかへ永遠に侵入しているのを見るのは、きわめてわずらわしいことだったにちがいない。

一つの妙な考えが浮かんできた。もしリード氏が生きていたとすれば、きつとわたしにやさしくしてくださったろうということを、わたしは疑わなかった——けっして疑わなかった。そしていま、白い寝台や暗くなった壁を見つめながら——またときどき、ぼんやりときらめ

く鏡のほうに、魅せられた視線を向けながら——死人について聞いた話、つまり遺言が守られないので墓の中で落ちつくことができず、誓いを破った人びとを罰し、しいたげられた人びとの恨みをはらしてやろうと、ふたたびこの世へ出てくるということを思い出していた。それで、リード氏の霊が、妹の子が虐待を受けているのに思い悩んで、その住まい——それは教会の納骨堂か、それとも死人たちの不可知の世界か知らないが——そこをはなれて、この部屋のわたしの前に出てくるかもしれないと思った。もし、ものぐるおしい悲しみのようにうすく見せると、わたしを慰めるために、この世のものならぬ声が起こつたり、暗がりから、背光をもった顔が出てきて、異様なあわれみを見せながら、わたしをのぞきこんだりするのではないかと恐れて、わたしは涙をふき、すすり泣く声をひそめた。そうした観念は、道理としては心を慰めるものだったが、それがほんものになるとすれば、かぎりなく恐ろしく感じられた。わたしは全力をつくして、その考えを押し殺そうとつとめた——気をたしかに持とうとつとめた。目の上にたれた髪を振りのけ、頭をもたげ、暗い部屋の中を勇敢に見まわそうとした。このとき、壁にきらと光るものがあつた。鑑戸のすきまから差しこむ月の光なのだろうか、とわたしは思った。いや、そうではない。月の光はじつとしているが、これは動いている。じつと見つめていると、すると天井に達し、わたしの頭上でゆれうごいた。いまならばすぐに推測できるのだが、この光の縞は、たぶんだれか芝生を横ぎる人が持っていた角灯の光だったのだらう。しかしそのときのわたしは、いまにも恐ろしいことが起こるものと思いこんでおり、神経がかき乱されておつたので、走り飛ぶ光は、あの世からくる亡霊の前ぶれなのだと感じた。胸がどきどきと打ち、頭がはてった。一つのもの音が耳をみたしたが、それは羽ばたきが押しよせるのだと思つた。何かがそばに寄ってきたようだった。重苦しくなり、息がつまってきた。耐えきれなくなった。わたしは戸口へ飛んでいって、死にもの狂いになつて錠前をゆさぶつた。外の廊下を走ってくる足音がして、鍵があ

けられ、ベッシーとアボットとがはいってきた。

「エアさん、気分でも悪いの？」とベッシーがいった。

「なんて恐ろしい音をたてるんでしょう！ からだじゅうにひびいたわ！」とアボットがさげんだ。

「ここから出してちょうだい！ 子供部屋へ連れて行ってちょうだい！」とわたしはさげんだ。

「どうしてなの？ けがでもしたの？ 何か見たの？」とふたたびベッシーがたずねた。

「そうなの！ 光が見えて、幽霊が出てくると思った」

わたしはこのとき、ベッシーの手をつかんでいたのだが、彼女はそれを引きはなそうとはしなかった。

「この子は、わざと悲鳴をあげたのよ」とさも憎げにアボットはいきった。「それになんて悲鳴でしょう！ 苦しくてたまらなかつたのなら、ゆるしてもあげられるけど、わたしたちをここへ呼びよせたかっただけなのよ。この子のいたずらな計略は、ちゃんとわかつてるわ」

「いったいなんのさわぎなの？」別の声が、きびしく聞きとがめた。リード夫人が廊下づたいにやってきたのだ。帽子の飾りが大きくゆれ、寝衣のきぬずれの音もあらあらかった。「アボットにベッシー、わたしが自分でくるまでは、ジェイン・エアを赤い部屋へ入れておくようにと命令したんじゃないかって」

「ジェインさんの悲鳴が、あまり大きかったものですから、奥さま」とベッシーが申しひらきをした。

「この子をかまわないで」という返事だけだった。「おまえは、ベッシーの手を放し。こんな手を使っても、外へは出られやしないよ、いいかい。わたしは手くだなんか大きらい、とくに子どものはね。ごまかそうたって、うまくゆかないことを教えてやるのがわたしのつとめだわ。これからあと一時間、ここにいなさい。ほんとうに従順でおとなしくなったら、はじめて出してあげよう」

「あら、伯母さま！ ご慈悲です！ お許しください！ がまんできません——ほかの罰をあたえてください——わたし殺されてしまいます、もしも——」

「おだまりなさい！ こんな気持ちがいたは、見てもぞっとします」そう夫人が感じたことは疑いなかった。彼女の目から見れば、わたしはませた女役者だった。わたしを、毒々しい癩癧と卑劣な根性と危険な腹黒さとの混合物だと、心の底から見ている。

ベッシーとアボットとが引きあげると、リード夫人は、もはや狂気をおびてきたわたしの苦悶とはげしいすすり泣きとに、がまんしきれず、いきなりわたしを押しかえして部屋に閉じこめ、それ以上の問答はゆるさなかった。彼女がすそをひいて去ってゆくのがきこえたが、行ってしまふともまもなく、わたしは、発作が起こったのだろう。すべてが無意識に閉ざされた。

3

そのつぎにおぼえているのは、ぞっとするような夢魔につかれた思いで目をさまし、わたしの前に、ものすごい赤い光がくるめき、そこにふとい黒い棒が入りこんでいるのを見たことだった。また何ものかの声が、うつろな響きで、そして風か水かの流れにつつまれてくぐもつたように、きこえてきた。動揺、不安、おしつぶしてくるような恐怖感などが、わたしの全能力を混乱させてしまった。まもなくだれかがわたしに手をふれてくれているのに気がついた。わたしを抱き起こし、すわる姿勢にささええており、しかもいままでにこんなに優しく起こされたり抱きあげられたりしたことはないと感じさせた。わたしは枕だったか腕だったかに頭をもたせかけると、安らかな気分になるのだった。

それから五分もすると、混迷の雲は消えた。わたしは自分の寝台におり、あの赤い光は子供部屋の暖炉の火だということがはっきりわか

った。夜だった。テーブルには、ろうそくが一本燃えていて、ベッシーが寝台の足もとに洗面器を持って立っており、一人の紳士が枕もとの椅子にかけて、わたしの方に身をかがめていた。

部屋のなかにゲーツヘッドの人でもない、リード夫人とは関係もない、見知らぬ人がいることがわかったとき、わたしはいよいよもなく、救われた感じ、保護と安全とを得たという確信を持った。ベッシーから目をはなし、(彼女がいてくれるのは、たとえば、アボットがいるのよりはるかにいやではなかったけれども)わたしはその紳士の顔をつくづくと見た。わたしの知っている人だった。召使が病気になる、リード夫人がときどき呼ぶ薬剤師のロイドさんだった。夫人は自分や子どもたちの場合は、医者にかかっていた。

「さて、わたしがわかりますかね」と彼はたずねた。

わたしは彼の名まえをいって、同時に手をさしのべた。彼はわたしの手を取り、微笑しながらいった。「そのうちよくなるからね」それからわたしを寝かして、ベッシーに言葉をかけ、朝まで静かにしておくようによく注意しなさいと命令した。そのうえ何かと指図をあたえ、あすまたきますからといって帰って行ったときは、わたしは悲しかった。彼が枕もとの椅子にすわっているあいだは、かばってくれる人がある、味方ができた、という感じがしたが、扉をしめて出て行ってしまうと、部屋じゅうが暗くなり、ふたたび心が沈み、いよいよのない悲しみに押しつぶされそうであった。

「眠れそうな気がする？ お嬢さん」とベッシーが、かなり優しくたずねた。

わたしはそれにはほとんど答える気になれなかった。つぎには荒い言葉が出てくるのではないかと思ったからだ。『眠ってみるわ』『何か飲みたくない、それとも何か食べられる？』

『ほしくないわ、ベッシー』

『それじゃ、わたしは寝ることにしましょう。もう十二時すぎですもの。でも、夜中に何かご用があったら、起こしてもいいのよ』

これはなんとおどろくべき優しさだろう！ それに勇気づけられて、わたしは質問してみた。

「ベッシー、わたしどうしたの、病気の？」

「たぶん、あの赤い部屋で泣いたりきけんだりで、病気になるんだよ。きつと、すぐによくなります」

ベッシーは、すぐ近くにある女中の部屋へは行っていった。彼女がいうのがきこえた――

「セアラ、子供部屋へきて、いっしょに寝てちょうだい。今夜は、とても、あのかわいいそうな子と二人きりでいる勇気が出ないわ。あの死ぬかもしれないわ。あんな発作をおこすなんて、たぶんではない。何か見たのかしら。奥さまは、どうもきびしすぎたわ」

セアラが彼女ともどってきた。二人は寝床にはいった。眠りにつくまで三十分ほど、ひそひそ話しあっていた。わたしは、二人の話のきれはしを耳にしたが、それをもとにして、おもな点を充分にはつきりと推測することができた。

「全身にまっ白い衣装のものが、あの人のそばを通過して、消えたのよ」――「大きな黒犬がそのあとについててね」――「部屋の扉を三度さわがしたくたたく音がして」――「教会の、あの方のお墓の真上に、光がさして」などなど、だった。

とうとう二人は眠ってしまった。暖炉の火もろうそくの火も消えた。わたしには、その長い一夜の刻々が、ぶきみな不眠の状態でつづいていった。耳も目も心も一様に、恐怖――子どもたちだけが感じる恐怖に張りつめていた。

この赤い部屋の出来事のあとに、ひどい長びく病気になることはなかった。それは、今日までも余波をのこしている衝撃を、わたしの神経にあたえただけだった。そうです、リード夫人、あなたのために、わたしは精神的苦悩のおそろしい痛みを受けていますが、あなたを許してあげなければなりません。あなたは自分のなきったことがよくわかっていなかったのです。わたしの心の琴線を断ちきりながら、わた